



TITLE:

[書評] 芳村弘道編「十抄詩・夾注
名賢十抄詩」

AUTHOR(S):

金, 程宇

CITATION:

金, 程宇. [書評] 芳村弘道編「十抄詩・夾注名賢十抄詩」. 中國文學報
2011, 80: 127-141

ISSUE DATE:

2011-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/201525>

RIGHT:

芳村 弘道編

『十抄詩・夾注名賢十抄詩』

金 程 宇

南京大學

芳村弘道氏編纂による『十抄詩・夾注名賢十抄詩』の出版は、域外漢籍の分野に關し長年興味を持ち續ける後進の筆者にとって、これ以上に喜ばしいことはなく、光榮にも書評の機會を與えられたことを先ずもって感謝したい。

『十抄詩』は高麗時代初期に編纂された唐詩選本の一つである。これには全部で三十名の詩人（うち中晩唐の詩人二十六名、新羅人四名）を收め、各人十首收録されているために「十抄詩」と呼ばれる。『十抄詩』は百餘首にのぼる佚詩を保存しており、またその注釋書である『夾注名賢十抄詩』（注釋者は高麗僧子山）は、多くの宋代以前の古籍佚文を含み、文獻的價值も非常に高い。そのため韓國の扈承喜

氏による發見以來、學界が遍く重視し、これまでに岡田千穂氏の詳細な修士論文（『十抄詩』の研究——『全唐詩』の佚詩と校勘を中心に——）、二松學舍大學、二〇〇二年。その一部は『域外漢籍研究集刊』第一輯「中華書局、二〇〇五年」に『十抄詩』及其注本的文獻價值」として收載）を含め、十篇程の論文が發表されている。

學術論文以外では、日中韓三國で近年それぞれ校訂本と影印本が出版されている。中國では查屏球氏の校訂した『夾注名賢十抄詩』（上海古籍出版社、二〇〇五年）が、韓國では孫氏舊藏松簷本『夾注名賢十抄詩』（韓國學中央研究院、二〇〇九年。以下「松簷本」と簡稱）のカラー——影印本が、そして日本では芳村弘道氏編纂の『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院、二〇一一年）が出版された。このように一つの書物が短期間に東アジア三國それぞれの國で、校訂や影印されていることはあまり見られない現象である。これら三部の中で芳村氏の影印本が最も新しい出版となつてはいるが、「後出轉精」の言葉どおり他に代わるものがない學術的價值がみられる。この影印本の特徴、文獻的價值に

ついで紹介するとともに、今後期待される研究の課題の一端を略述したい。

* * *

芳村弘道氏編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』の目次・構成は以下の通りである。

本文影印

十抄詩（北京大學圖書館藏本。以下「北大本」と簡稱。）

夾注名賢十抄詩（財團法人陽明文庫藏本。以下「陽明本」と簡稱。）

解題編

解題

不鮮明・缺損箇所一覽

異體字一覽

資料編

『十抄詩』・『夾注名賢十抄詩』所收詩人・作品一覽

參考書影

跋

『十抄詩』・『夾注名賢十抄詩』詩人名・詩題索引

全體的にみると、この影印本には以下の長所がある。

一 優れた底本の選擇

『夾注名賢十抄詩』（以下『夾注』と簡稱）の中には『十抄詩』の内容を包含しているため、學界はこの書を校訂出版する際に、前述した中國校訂本や韓國の影印本のように『夾注』を中心にしている。しかし『十抄詩』と『夾注』の正文とは異同が散見され（四八四頁）、兩本は嚴密に言え、實際には同じ典籍ではない。この認識に基づき、芳村氏は兩書を併せて影印し、「合璧本」（五四五頁）として、我々に多大な利便を提供されたのである。

『十抄詩』について北大本を影印したのは最良的選擇であつた。その所以は、該書が現在日本には所藏されておらず、韓國所藏のものも殘缺が見られる上、保存状態が悪く、影印に相應しくないからである。二〇〇七年六月、筆者は

芳村氏と共に韓國ソウルへ調査に赴き、この點について議論したが、二人の意見は完全に一致した。北大本は完好である上、印刷が鮮明である。且つ日本の山本北山や佐藤硯湖の舊藏書であり、壬辰時代に中國から日本に流傳し、再び中國へ流出したと思われるものでもある。該書を影印することは、日中韓三國の書籍流傳の研究にとつても特別な意義を持つ。北大本を影印することに確定したのは、現存する諸本について熟慮を重ねた結果であつたと言えよう。

更に『夾注』を見てみる。前述したように二〇〇九年に韓國學中央研究院は韓國慶州孫氏の舊藏本を影印出版している。カラーで印刷され、まことに精美なものであるが、芳村氏による詳細な検討の結果、陽明本は校勘を経た補修本で、印刷自體は孫氏松簷本にやや劣るものの、内容的にはそれより正確であるとのことである。中國で出版された整理本は、近代寫本を底本に用いて整理したため問題が非常に多く、張鵬『「夾注名賢十抄詩」補正』（『域外漢籍研究集刊』第四輯、中華書局、二〇〇八年）によつて百五十箇所もの訂正が施されており、やはり正確な本文の提供が待望さ

れていた。異版である陽明本の影印は時宜になつたものであり、松簷本及び中國校訂本にとつても重要な補充の役割を果たすであろう。

影印本の底本を確定するには高い見識が求められるが、北大、陽明文庫兩藏書機關の複製許可を得て影印作業を展開することは、容易に見えて實際には非常に困難なことであつた。ここに筆者は自らの體驗を交えてその經過を説明したい。私が初めて北大本の調査をしに行つたのは二〇〇一年初秋であつた。當時上海に居住していた筆者は、調査を行うため自ら北京まで足を運んだ。北大の管理者はマイクロフィルムを提供するだけで、原書の閲覽は許さなかつた。また、全文複製の申請をしたところ、即座に斷られてしまつた。複製が許可されたのは部分のみ、全體の三分の一を超えない範圍であつた。調査の爲に多大な時間と費用を掛け、わざわざ現地まで足を運んでみたものの、複製できる僅かな範圍を選択することだけしかできなかった。全文を手に入れることができず、まして原書を手にとることができないということは、版本學者にとつて遺憾千萬なこ

とであつた。

陽明文庫本に觸れよう。二〇〇三年春、東京に滞在していた時のことである。陽明文庫に電話し閲覧の機會を得たい旨を希望したところ、閲覧には事前豫約が必要な旨を告げられ、順番待ちは最長の場合半年先になるとのことであつた。逗留期間が一ヶ月に満たない筆者にとつて、この事はずくづく困難であるとし、諦めるよりほかなかつた。これに相反し、芳村氏は陽明文庫の實地調査をされただけでなく、二〇〇四年夏には汲古書院から陽明本を影印する計畫を確定しておられた。北大本については在外研修を利用し、二〇〇八年六月に自ら北京大學へ赴き、最終的には複製と影印の許可を取り付けられたのである。本書の影印作業は六年越しの歲月を経て完成したのであるが、その間にも紆餘曲折があつたことは推して知るべしである。筆者は、本書を手にし、長年の願望が芳村氏の努力を経て達成されたことに、感慨を禁じ得なかつた。讀者はこの影印本を翻閱するたびにその便利さを享受することだろう。

二 精緻な解題

解題は影印本の質を左右する重要な要素である。影印本の價值は、もとより影印本そのものが持つ學術的價值によつて決まるが、もし解題者がその書を深く理解せず研究を行つた場合、大概その解題は表面のみの言及に止まり、獨自の見解にまで至らず、參考的價值は乏しいものとなる。筆者が知る限りでは、編者芳村弘道氏はこの方面で既にいくつかの論文を發表し、いずれも問題を深く掘り下げている。「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基本的考察」(『學林』第三十九號、二〇〇四年三月、その後『唐代の詩人と文獻研究』[中國藝文研究會、二〇〇七年六月]に收載。以下「考察」と簡稱)は、力作と稱されよう。

該論文の冒頭では陽明本を用いて『夾注』釋子山序文が補全され、初めて學界に該書の注釋者の名を知らしめた。佚詩輯佚方面においても、羅鄴「望江亭」詩が既に『樊川文集夾注』に見えることを指摘し、筆者を含む先行研究の錯誤を補正された。『夾注』の成立時期に關しては、朝鮮本『樊川文集夾注』との比較を通して、兩者の引書の大部

分が重なり合い、襲用の關係を有することを指摘している。引用する文獻の最も新しいものは『詩史』、即ち『黃氏補千家集注杜工部詩史』（『補注杜詩』）であるので、『夾注』の成書は一二〇〇年代後半から一三〇〇年代前半であると推定しており、この見解はとりわけ獨創的である。この判斷は『夾注』成書時の、高麗の漢籍保存や漢學研究等の問題とも關わり、甚だ重要である。ついでに言及すれば、李白「五雲歌」詩注にある「謝朓の宅は當塗の青山の下に在り」を根據に、『夾注』は南宋の楊齊賢もしくは元代の蕭士贇の注釋を參考にした可能性がある（査屏球『夾注名賢十抄詩』『說明』四頁）とされてきたが、實はこの注は早く靜嘉堂文庫所藏の北宋本『李太白文集』卷七に見えるので、楊、蕭注を參考にしたとの説は排除されるべきである。

本書の解題の四章までは、編者の「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄詩』をめぐって——『千載佳句』との關連性」（『和漢比較文學』第四十號、二〇〇八年）を基礎にして増補を行ったものである。新しく増補された箇所（第五、第六章）は、北大本と陽明本それぞれに對し版本學的考察

を行ったものである。初めて『十抄詩』、『夾注名賢十抄詩』の版本の源流について整理を行い、『十抄詩』においては文字の異同や刊刻の風格・字様を根據に、奎章閣が原刻本であるとし、北大本と晚松本は補刻（上卷第十二葉、十三葉）の後修本であると指摘している（四八二頁）。現存する『十抄詩』の刊刻は『夾注』より新しいものであるが、兩者の差異は甚だ大きく、編者は「以上の相異から考えて、整版本『十抄詩』は『夾注名賢十抄詩』から本文を抽出して再編されたものとは一概には言えないであろう。別に正文本『十抄詩』が存在して、それを底本に用いて刊刻された可能性も十分に考えられる。」（四八四頁）としている。

陽明本『夾注』について芳村氏は松簪本と對照し、松簪本が初印本であること、陽明本・奎章閣本・中央本が後修増補本であり、後修本は初印本に對して多く修訂が施されていることを指摘した（四八七頁）。特に後修本で増補した初印本の「梁山伯祝英臺傳」における二つの缺字が存在することは極めて貴重である。氏の版本についての増補部分は分量こそ多くないものの力を入れて論述されており、これこ

そ『十抄詩』、『夾注』研究に關わる最新の成果なのである。

三 使用の際の便利さ

本書の附録數種類も有益で、影印本の使用に更なる利便を與えている。「詩人作品一覽」は三段に分ち、上中二段は『十抄詩』と『夾注』の詩題を對應させ、それぞれ作品番號と詩人別番號（佚詩は白抜き數字で表示）及び影印本の頁數を注し、檢索に極めて便宜を與えている。第三段は備考欄とし、本集、『全唐詩』、『千載佳句』、『東文選』等總集や『全唐詩逸』、『全唐詩補編』等輯佚書の收録狀況を注し、詩作の存佚、詩題の主な異同を直ちに檢索できて非常に便利である。

* * *

『十抄詩』と『夾注』の學術的價值は、學界に多くの議論を惹起している。以下にその紹介をしたい。

1 輯佚・校勘上の價值

まず、『十抄詩』と『夾注』が注目される點は、多くの佚詩と典籍佚文の存在にある。この方面については筆者を含め、扈承喜氏、岡田千穂氏、查屏球氏、芳村弘道氏等の學者がすでに研究を行っている。

唐詩輯佚について言えば、周知の通り、代表的な著作は『全唐詩補編』（陳尚君輯校、中華書局、一九九二年）である。これには中國近代以降の諸先學による重要な唐詩の發見を含め、三百餘首に達する敦煌文獻の王梵志詩を收録する。また世に傳わる文獻の中では南宋本から百五十餘首の張祐詩を發見し、域外漢籍の方面では『遊仙窟』に據り張鷟の詩五十九首を補い、『千載佳句』に據り大量の殘句を補録し、更に『桂苑筆耕集』に據り百首近い新羅の崔致遠の詩を補った。それらは相當な數に及んでいる。『全唐詩補編』は、唐詩輯佚において詳細徹底した作業を行っているので、その出版以降、大量の唐人佚詩の發見は殆ど見ることが出来ない。筆者「『全唐詩』補遺札記」の一文（拙著『稀見唐宋文獻叢考』、中華書局、二〇〇九年）は、これに對

する詳しい説明をしているので参考にされたい。

『十抄詩』は百首に近い唐人の佚詩を収録するが、中でも章孝標、吳仁璧、韋蟾、韓琬、李雄のような中小詩人の作品が多いことは非常に稀なことであり、『十抄詩』中の唐人の佚詩は、近二十年來の唐詩輯佚の最も重要な收穫の一つであることは言うまでもない。域外漢籍研究からいえば、『十抄詩』は『千載佳句』と雙璧と稱しうるが、作品の完全（保存）性から見れば、遙かに『千載佳句』を超えている。

『夾注』中にも佚文が多い。その中で最も注目を集めるのが「梁山伯祝英臺傳」の佚文である。芳村氏は、「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』中の「梁山伯祝英臺傳」と「梁祝故事」説唱作品との關聯」（『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』、研文出版、二〇〇六年三月）の中で、『夾注』の「梁山伯祝英臺傳」と明清説唱文學を引用して比較を行い、南宋時代には既に後世の梁祝故事の主要な内容を備えていることがこの佚文に據って判るので、「梁山伯祝英臺傳」は梁祝故事を始めとする俗文學研究に有意義であるという。

この佚文は朝鮮本『樊川文集夾注』が『玄宗遺錄』中の楊貴妃資料を掲載しているのと同様、先行する文獻に對し重要な補充的價值がある貴重な新資料であり、甚だ注目すべきである。この他に唐代の地誌である『十道志』や宋代詩話の『漢皇詩話』等（『考察』五四三、五四四頁を参照。）も輯佚作業を行う際に参考になる典籍である。

校勘について言えば、『十抄詩』所收の約二百首が新出の唐詩校勘の資料である。『十抄詩』は唐代の舊本を多く引録しているため、校勘價值が極めて高い。例えば、白居易の「錢塘春日卽事」は、宋本では「杭州春望」に作り、諸本に異文は無く、刊本時代の文字の様相を反映しているところが『千載佳句』は「錢塘春日卽事」（杭州春望イ）に作り、『十抄詩』と一致しており（『作品一覽』五〇九頁下段）、唐代寫本の系統より出づることは明白である。謝思焯『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）は、これを校記に載せず、非常に惜しいことである。更に『夾注』は當時に見ることが出來た資料を利用して校勘を行っている。多く「一に作る」などの校記があり、校勘上の價值も有し

ていよう。

2 考證上の價值

『十抄詩』と『夾注』は、多くの新資料を含んでいる。筆者が韓琮詩に關する研究に示したように、文獻考證に頗る有益なものがある。唐詩文獻にある韓琮、韓漑、韓喜三人の詩について、その歸屬問題は、明代以來解決されないままである。『十抄詩』は韓琮詩十首（この内五首は佚詩）を載せ、久しく佚傳している韓琮詩集を採用しており、全て新出資料である。筆者はこの問題に踏み込んで、五代時代の徐夔の單題詩と韓琮詩との次韻關係、及び韓琮「愁」詩の歷代傳訛の狀況を發見した（拙著『稀見唐宋文獻叢考』中華書局、二〇〇九年所收「韓琮單題詩考辨」）。もし『十抄詩』という新資料を利用できなかったならば、この問題を解決することが出来なかつたことは明らかである。

また、『樊川文集夾注』注釋者の國籍問題に關しては、高麗や李朝人とする説（羅振玉、楊守敬）、あるいは中國人とする説（董康、許山秀樹、韓錫鐸）が提出されたものの確

證は無かつた。これまでの諸家は、『夾注』を利用できず、間違つた推斷を下していたのである。これに對し芳村氏「考察」は、この『樊川文集夾注』と『夾注名賢十抄詩』の二書を具さに比較し、正しい推論を導いた。即ち、この二書は基本的に同一の書を引用しており、特に杜牧注釋において重複する箇所が多い。『夾注名賢十抄詩』の成立は、僅かに『樊川文集夾注』より遅い可能性があるが、兩書とも高麗時代に書かれたもので、高麗人が撰者であるとの結論を呈示した。この結論には、疑問を差し挟む餘地がない。羅振玉の成簣堂文庫所藏『樊川文集夾注』跋に、「徵引する所は南宋人の圖書に至れば、則ち注者は元明の際に在り必ず是れ高麗人の撰ならん」といつている。その見解はまさに正確というべきもので、感心させられる。この判斷は『夾注』の文獻によつてようやく論證されるに至つた。

3 典籍流傳學上の價值

高麗時代の文化を研究するのに最も困難なことと言えば、典籍の目録が少ないことである。高麗時代に中國の典籍を

大量に保存していたことは確かであるが、それに關する資料が極めて少なく、これは學者の深く遺憾とする所である。當時の典籍の流傳狀況は、高麗時代の歴史書や詩文集などの資料によって考察するほか方法がなく、『十抄詩』と『夾注』の發見は、この課題の研究に役に立つのである。『十抄詩』と『夾注』を通して、唐人詩集の新羅と高麗における流傳についての理解を更に深めることができる。兩書所收詩の全てが各詩人の本集から拔粹されたと斷定することは困難であるが、新羅や高麗に各本集の大部分が將來されていたであろうことには相違ない。

また『夾註』中の典籍が『十抄詩』より更に豊富であることは、資料的價值が高い。筆者は『太平廣記』の流傳を考察する際に『夾注』を利用して資料八點を發見し、該書が高麗時代に流行していることを指摘したが（拙著『域外漢籍叢考』、中華書局、二〇〇七年所收「韓國古籍『太平廣記詳節』新研」）、これは本書が非常に參考になったという好例である。もう一つの例として、李嶠の單題詩注がある。この注釋書は、中國本土では散佚し、僅かに敦煌本の斷簡と

日本の古抄本が残っているのみであるということから、學界から重視されている。朝鮮半島ではこれに關連する資料は今まで發見されていなかったが、芳村氏は『夾注』のなから李嶠の詩注二條を發見した（「考察」五三四、五三五頁）。それら全ては日本の古抄本の中にも見られ、李嶠の詩注が曾て高麗に傳來していたことが證明された。これによって李嶠の詩注は、詩學の入門書として唐宋時代に流行しただけでなく、域外にも大きな影響を齎していることが判明する。日本と朝鮮半島において基本的な中國古典籍を受容する際には類似點があり、このことに注目すれば、互いの受容を證明しうる場合がある。この李嶠の詩注は、まさにその好例といえよう。

4 選本史、注釋史上の價值

『十抄詩』は、朝鮮半島で編纂された現存最古の詩選であるばかりでなく、東アジア現存の最も古い七律の選本でもあり、甚だ珍重すべきものである。『十抄詩』は、中晚唐詩の選本では早期のものに屬し、中國の『又玄集』と日

本の『千載佳句』と時代的に近い存在なので、比較する価値がある。また日中韓三國の唐詩選録の共通點と相異點について深く研究する上にも大變有益である。芳村氏は『十抄詩』と『千載佳句』を比較し、相互に見える詩人が十三名あり、選録の高い重複率を發見した。そして、二書の間で互いの影響關係は認められないものの、成立した時代が近い唐詩選本であり、中晚唐詩を重視する共通した傾向を有しているとして、「今後、平安漢文學を考察するにおいては、朝鮮半島の漢文學の動向にも注意を向ける必要があると思われる。その重要資料として、本書に影印した『十抄詩』、『夾註名賢十抄詩』の利用は缺かせないであろう」（四七八頁）と指摘する。これについても筆者は深く共感するところである。

『夾註』の注釋も重視するに値する。注釋者子山は中國典籍をよく知悉し、引用範圍が廣く、多くの點で清朝の人や現代人の注釋本より優れ、詩に對する理解も非常に有益だからである。それだけではない。唐詩注釋史から見ても、『夾註』は重要である。現存する唐詩の選注本は、十四世

紀以前の著作物から見れば、ほんの一握りであり、僅かに『注解章泉澗泉二先生選唐詩』、『贅箋唐詩絕句』、『増注唐賢絕句三體詩法』、『唐詩鼓吹』などの數部があるに過ぎず、またその評價は悉く低い。これらに較べ、『夾註』は簡明にして要領を得、注釋の構成も謹嚴で、東アジアにおける優秀な唐詩選注本といえる。

* * *

以上の諸點から、『十抄詩』、『夾註』は、多方面に互り學術的價值が高いことがお分かりいただけるであろう。兩書について既に少なからぬ研究成果が見られるが、東アジア漢詩學研究上の重要な選本、注本として、深く討究すべき個所がなお多く残されている。ここで簡単に筆者の見解を述べてみたい。

例えば『十抄詩』の編纂問題について。『十抄詩』が収めているのは三百首である。これは從來「詩三百」の編纂傳統を模倣したものと認められており、筆者もこれに關して完全に同意する。しかし指摘しなければならないことは、

この編纂方法がおそらく『又玄集』（韋莊編、光化三年、九〇〇年成立）に影響を受けていることである。『又玄集』の序に「名詩三百首」（實際には二九九首である）とあり、これが唐詩を三百首選んだ最初の例である。『十抄詩』中の二十六名は唐五代の詩人で、その内の二十一名は『又玄集』に見える。五代の李雄を除き、実際にはただ四名の唐人（李山甫、秦韜玉、皮日休、吳仁璧）のみが『又玄集』に見えない。また選録作品にも重複が確認できる。少なからぬ詩人と作品が『又玄集』中にも収録されるのは、偶然ではないかもしれない。これから見れば、『又玄集』は『十抄詩』の選録に對して一定の影響を與えており、注意して比較する必要がある。『又玄集』の朝鮮半島に傳來した具體的な時期は確定されていないが、『夾注』にも『又玄集』の序が見え（二六七頁）、現在これが最も古い引用記録である。その他、なぜ三十名という数なのかという問題がある。『又玄集』以前の大曆時代の寶常所編の『南薰集』（『郡齋讀書志』卷四）がこの数と同じであるが、『十抄詩』の編者が參考にしているかどうかは定かではない。

『十抄詩』の具體的作品の來源は考察する價值がある。一例を巻頭の劉禹錫詩に採ってみよう。劉禹錫における十首のうち九首は宋本『劉夢得文集』外集卷一に見ることができ、他の一首は白居易の「上淮南令狐楚相公」（宣武令狐相公以詩寄贈傳播吳中）が誤つて收められている。この狀況は恐らく特殊な原因に因るものであろう。劉禹錫『外集』の前二卷は、大部分が既に散佚している『劉白唱和集』（以下「唱和集」と簡稱。柴格朗譯注『劉白唱和集（全）』）[「勉誠出版、二〇〇四年」を參照]に基づくものである。『十抄詩』中の劉禹錫の作品は、結局のところやはり『唱和集』に據るものではあるまいか。筆者は『唱和集』から選録した可能性は大きいと考える。『十抄詩』が「劉白」を最初に置いたことは、特別の注意を拂うに値する。晩唐張爲の『詩人主客圖』は中晩唐詩人について編纂したものであるが、その中で白居易を「廣大教化」として甚だ崇め奉っている反面、劉禹錫を「瑰奇美麗」の「上入室」に列し、地位は明らかに白氏より低く置き、當時の中唐詩人の地位に關する見解がよく表されている。これに對して

『十抄詩』は劉詩を前に、白居易を後に置いている。この序列は『劉白唱和集』より選録した證據になるのではなからうか。

この他の特徴として白詩を誤收している點がある。これは『唱和集』の中に白詩も收録されていることが原因だと思われる。『唱和集』は白居易によって編纂されたもので、時間の順序で詩歌が配列されていることは明らかである。前述の誤收された白居易の詩は、劉禹錫詩「白舍人寄詩嘆早白無兒因以贈之」と「酬白樂天」の間に置かれている。

考證によると、劉詩は寶曆元年（八二五年）夏と寶曆二年（八二六年）に作られたもの、白居易の詩は寶曆元年に作られたものと考えられ、當時の劉禹錫は令狐楚とも交友があった點から見ても矛盾は生じない。残念なことには、現存する劉集にこの和詩は未收である。既に亡佚してしまったのかもしれない。當然のこととして、唐代の別集には唱和相手の作品が附載されているものの、一般的にはその詩數は多くない。もし數量的に多くなると、普通は單行出版されるはずである。現存する白居易集は總て唱和の相手側

の詩を掲載していない。劉集もこの状態だと思われる。従つて『十抄詩』における白詩の誤入は、劉氏の本集を根據にすべきではなく、『唱和集』に據るものとしなければならぬ。白居易「劉白唱和集解」中に言及される二首が『十抄詩』の第二首と第四首に見え、選録には『唱和集』を利用した可能性があると考えられる。この他にもまだ別の根據が残されているが、紙幅の関係もあり、ここでは深く論及しない。以上の例からも判るように『十抄詩』の選録の來源は非常に複雑であるので、細心の注意を拂わなければならない。

『十抄詩』選録詩の題材は、これまで誰も言及していないが、實に重要なものである。内容から見れば、凡そ、贈答、送別、懷古、詠物、旅行、亭閣等の分類が可能である。注目に値する點は、『十抄詩』中に比較的多く選録された道教、或いは隱逸傾向の詩にあると考えられる。曹唐の「遊仙詩」は改めて言及するまでもないが、漁夫を詠む詩は、「漁父」（白居易）、「贈彭蠡釣者」（杜荀鶴）、「釣翁」（秦韜玉）等があり、處士、隱士を詠む詩は「宛陵題蒙處士齋即

元微君舊居」(吳仁璧)、「憶江南李處士居」、「送進士曹松入羅浮」(崔承祐)、「贈岳人」(賈島)等があり、李群玉の最後の二首は「盧逸人隱居」と「道齋」である。これらの詩には編纂者の思想的傾向がよく表れている。隱遁を詠むことは晩唐五代詩によく見られる主題だが、當時の選本はこれをあまり重視していない。例えば、『又玄集』には隱遁が詠まれている作品は皆無である。『才調集』に収める千首は、曹唐の大遊仙詩を選録しているものの、漁夫を題材にしている作品は僅かに二首に止まり、その他の隱遁類の詩は少ない。詩歌の藝術性のみから選録されているようであり、明確な傾向があると言うことは難しい。これら二書を比較してみれば、『十抄詩』選録の詩は、道教と隱遁が色濃く出ていることは明らかである。編者が意識的にそのテーマを選んでいるのであろう。このことは『十抄詩』の成立時期を考察する上で大切なことである。一般的に言えば、隱遁傾向は社會の變動が大きい時期に顯著に表れており、朝鮮半島の歴史に鑑みれば、新羅が滅亡して高麗による統一が果たされた時代(九三五年)の初期段階に當たる

のではないかと考えられる。高麗の科擧制度は光宗時期(九五八年)より施行されるが、もし本書の背景に科擧(の爲の作詩)があることも考慮に入れるならば、『十抄詩』の成立時期は九六〇年前後を下限とするであろう。なお、日本の『千載佳句』引録の詩は、本書と非常に似通っており、兩者同一時期に屬する産物ではあるまいか。

『十抄詩』が高麗・朝鮮漢文學に與えた影響問題に關しては、現在、まだ研究が十分には及んでいない。筆者は高麗の林惟正の集句、李奎報の次韻詩の『十抄詩』利用を曾て指摘したことがあるが(拙著『域外漢籍叢考』中華書局、二〇〇七年所收「十抄詩叢筭」)、更に追加すべきものが多い。ここで少し例を擧げてみたい。

朝鮮金終弼(十六世紀の人)の『楓巖集』に「和皮日休洞庭春暮詩韻」と題する詩がある。既知の皮日休の詩においては唱和のもとになった作品が見られないが、韻字は「平、明、聲、行、羹」で、『十抄詩』所載の皮日休「洞庭春暮」詩の韻字と全く同じである。金終弼が皮日休に追和次韻した詩は、『十抄詩』中のこの詩より出たとすべき

である。從來これが皮日休のどの詩によるか判らなかつたのは、皮詩の中國本土散佚が原因である。徐聖著（二六六四～一七三五）『訥軒文集』卷二「輓李持平適意」の首聯「文章高價擅吾東、科藝傳家得素風（文章の高價は吾東にほしまま擅にし、科藝の傳家は素風を得たり）」は、張籍「和度支胡尚書言懷寄楊少尹」詩の首聯「早年聲價滿關東、科藝傳家得素風（早年の聲價は關東に滿ち、科藝の傳家は素風を得たり）」と比べて、後句が完全に一致しているのみならず、前句も明らかに模倣した痕跡があり、張籍の詩を踏まえた詩であると思われる。

集句、次韻、引録を除いても、更に「詩語」上から考察を加えるべきものがある。高麗の李承休（一二三四～一二三〇）○『動安居士集』の『動安居士行錄』卷三「復用前韻、上竹堂三學士」（鄭直講）詩の「十載身閑虛白屋、七年衣化軟紅衢（十載身は閑なり虚白の屋、七年衣は化す軟紅の衢）」は、後句「七年衣化」の措辭が極めて珍しく、文淵閣『四庫全書』電子版で檢索しても見ることが出来ない用例である。しかし『十抄詩』章孝標の「及第後歸吳訓孟元翊見寄」に

は「七年衣化六街塵」という句（中國本土傳本では「六年衣破帝城塵」に作り、『全唐詩』卷五〇六章孝標「初及第歸酬孟元翊見贈」に見える）があつて、李承休の該句は、章孝標の詩によつて作られたものであると思われる。

漢文學ばかりでなく、『十抄詩』の影響は高麗、朝鮮の「國文學」にも徐々に浸透していった。この方面で最も興味深い例がある。白居易の「漁父」の詩である。先述した如く先行學者は均しくこの詩が『十抄詩』や『夾注』本にのみ見えると指摘したが、筆者はこの詩が朝鮮時代に廣く詠い繼がれた時調歌詩の典故であること、そして、それは高麗末期に遡ることを發見した。現在知られる改編本時調「漁父詞」は、二つの系統に分かれる。一つは佚名改編の十二章歌詞で、もう一つは李賢輔がこれに基づき改編した九章歌詞である。前者は高麗末期の歌詞の可能性があり、後者は大儒李滉が讃頌している上に、尹善道の「漁父四時詞」に對しても頗る影響を與えており、佚詩「漁父」の高麗や朝鮮文學への影響は非常に深いことが見て取れる（筆者に未發表論文「十抄詩」與韓國漢文學）があり、これに對す

る詳細な考察を行っているので、ここに贅言を加えない。

出版方面の資料も、なお掘り起こすに値する。景泰三年（一四五四年）『夾注』は密陽で出版された。該書の刊記列銜には「都觀察黜陟使」なる李崇之等の人物が記載されている。李崇之本人は古典籍出版に熱心な人物であり、一四四七年に慶尙道尙州において『唐翰林李太白文集』を出版し、この後『夾注』出版と同時期に、密陽で『楚辭』と『新刊類編歷舉三場文選古賦・新刊類編歷舉三場文選對策』の兩書を主持出版している。このことから『夾注』の朝鮮時代の刊刻には、科擧が背景になっていることは確實である。

この他に、基礎的な作業も行う価値がある。『夾注』の引書索引を編成する必要があるが、それには出来れば誰かが詳細なる引書考證を行うことが肝要である。この方面では日本學者による優れた手本、『文選李善注引書考證』『令集解所引漢籍備考』等の著作があるのでお勧めしたい。『樊川文集夾注』を包括しても差し支えない。なぜならば、典籍目録が乏しい高麗十三世紀前期の缺點をカバーし、中

國典籍の高麗への傳播についても、深く理解する上で必要があるからである。韓國學の研究領域内においても近い將來、小島憲之『上代日本文學と中國文學——出典論を中心とする比較文學的考察』、『國風暗黒時代の文學』のような重要な著作物が現れるのは必然とみられる。その時『十抄詩』と『夾注』は最も基礎となる文獻の一つとなることは間違いない。

最後にまとめてみよう。『十抄詩』及び、『夾注』の學術的價值は極めて高く、今後更に検討する作業が待たれている。芳村氏所編の『十抄詩・夾注名賢十抄詩』は、底本の選擇、解題の深さ、使用上の便利さ等において優れており、繼續して深く研究するための堅固な基礎を提供した。我々研究者が東アジア漢文獻の總體的研究を行う時、『十抄詩』と『夾注』とは、必ずや新たな評價（認識）を得るであろう。その利用と研究とは、本書の出版により確實に一つの新しい段階に進んだと信じて疑わない。

（汲古書院、二〇一一年三月、本文五四六頁・索引七頁）